

プロジェクト名	思考力を育てるメディア学習教材の開発		
プロジェクト期間	平成 22 年度		
申請代表者 (所属講座等)	寺岡 聖豪 (学校教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	なし
取組方法および 取組実績の概要	<p>(1) 思考力及びメディア学習に関連する著作・論文を収集し、その内容を分析した。思考力については「生きる力」、「学士力」、PISA など、公表されている資料を対象とした。メディア学習教材については著作『わたしたちとじょうほう』『私たちと情報』(学研)、小学校国語科教科書(光村図書)を対象とした(平成 22 年 8 月より 10 月まで)。</p> <p>(2) (1) の分析をもとにして、小学校から中学校までのメディア学習カリキュラム(暫定版)を作成した(平成 22 年 11 月から 12 月まで)。</p> <p>(3) (2) をもとにして、メディア学習教材の事例となるものを検討した。その際、平成 21 年度及び平成 22 年度、学部授業「メディアと教育」の受講生とともに開発した模擬授業を手がかりとして、事例集を作成した(平成 22 年 12 月から平成 23 年 2 月まで)。</p> <p>(4) (3) の事例集を再検討するとともに、メディア学習カリキュラム(暫定版)をブラッシュアップした。そのため、時津啓氏(広島文化学園大学社会情報学学部講師)を招き、専門的な立場から示唆を得た(平成 22 年 12 月から平成 23 年 2 月まで)。</p> <p>(5) 以上の活動について、研究成果報告書にまとめた(平成 23 年 2 月)。</p> <p>(1) と (2) の研究成果として、『見る教育』と『見せる教育』というテーマで、九州教育学会第 62 回大会(平成 22 年 12 月 12 日、九州大学)において、発表した。</p>		
研究成果の概要	<p>本プロジェクトではメディア学習カリキュラムとメディア学習教材(9つの事例)を開発した。このカリキュラムとメディア学習教材を小・中学校において、どのように使うのか。本プロジェクトの主眼はまさにこの点にあると言ってもよい。そこで、このカリキュラムとメディア学習教材の使い方について、以下の三点を挙げたい。</p> <p>第一に、小・中学校に「散乱」しているメディア学習教材の質を吟味するための「ものさし」としての使い方である。小学校でも、中学校でも、同じ内容と同レベルの授業が行われているかもしれない。習熟を目的とするならば、それでも構わない。しかし、そうでないならば、見直さなくてはならない。</p> <p>第二に、小学校や中学校、それぞれの学校単位でメディア学習を体系化していくための「広場」としての使い方である。メディア・リテラシーは生きる力にも通じる、総合的な資質能力である。したがって、教員は共同してメディア・リテラシーの育成を図ることが求められる。このカリキュラムとメディア学習教材はその取り組みとなるためのアジェンダとならないだろうか。</p> <p>第三に、構造化・系統化された学習を継続していくための「羅針盤」としての使い方である。それぞれの学習活動の成果を水準項目との程度によって評価する。このことを通して、子どもたちがメディア学習の地図のどこに位置し、どこに向かって教育していけばよいのかの見通しをもつのである。</p> <p>申請代表者は本プロジェクトの研究成果をメルエクスポ 2011 において発表し、国内外のメディア学習の実践家とその研究者、メディア関係者とその研究者と意見交流を図る予定である(平成 23 年 3 月 19/20 日、東京大学)。</p>		

<p>また、開発したメディア学習カリキュラムとその学習教材を収めた DVD を作成し、メディア学習の実践家（小・中学校教員）に活用してもらうために、配布する。そして、この DVD は来年度の学部授業「メディアと教育」において、教材としても活用する。</p> <p>本プロジェクトでは、メディア学習教材をすべてのセルにおいて作成できなかった。そのため、本プロジェクトはまだ進行中である。今後、小・中学校の教員との意見交流を図りながら、研究を続け、より魅力的なメディア学習教材を開発していきたい。</p> <p>以上が本研究の成果である。なお、九州教育学会第 62 回大会で発表した内容については従来とは異なった側面、「見る」と「見せる」に光を当てて、メディア・リテラシーの教育を考察した点が高く評価された。</p>			
外部資金獲得申請及び研究成果の公表方法について			
外部資金獲得申請（予定）	科学研究費補助金	研究成果の公表方法（予定）	国内学会で発表予定